

宮大工と歩く奈良の古寺

小川三夫 著

建築技術を持った大工さんの中でも神社仏閣の建築を専門とする方を「宮大工」と呼ぶことは、ご存じのことと思う。著者の小川三夫氏が宮大工になるきっかけは、高校の修学旅行で法隆寺の五重塔を見たことであると記されている。教育関係に携わる者として、修学旅行が将来の職業選択につながっていることに喜びを感じるところである。

実家が大工でもなく、職人の家でもなく、サラリーマンの父を持つ家庭で育った小川氏は、学校の成績も悪く、将来の展望もなく、寺のことも歴史にもまったく関心がないまま、修学旅行の説明コースに従って法隆寺の境内に嫌々入り、五重塔をぼんやり見ていたそう。その時、案内人の方の「1300年前に建てられたものです。」という言葉に衝撃を受け、「1300年前にどうやって建てたのだろう、どんな人が建てたのだろう」ということが脳裏をかすめ、1300年のとてつもない長い時間が実感として感じられたと同時に、高校生の自分には目の前の五重塔が素晴らしいものに見えた。ロケットが月に向かって飛ぶ時代に、1300年前の大工の仕事に興味を持ち、法隆寺の五重塔の建築に憧れを感じたと言っている。

小川氏が師匠である西岡常一棟梁に弟子入りしたとき、「古建築の本を読むことも寺巡りも必要ない。知識でものを見たら、見えるものも見えなくなる。感じ取るべきものを他人から借りた言葉で表現してしまう。心を素にして、自分が感じ取るようになって初めて建物を見、知りたいことができたなら先人に学べばいい。」との教

えを受けたそうである。小川氏が棟梁となつてから、改めて法隆寺を訪れても学ぶところが多く、教えられ驚かされることが多いそうだ。

さて、この本では、以下のお寺について紹介されている。また、歴史に関しては法隆寺の大野玄妙（げんみょう）管長、薬師寺の山田法胤（ほういん）管主の話を基に記述している。

- ①法隆寺 ②法輪寺 ③法起寺 ④薬師寺
⑤唐招提寺 ⑥東大寺 ⑦興福寺 ⑧元興寺
⑨十輪院 ⑩宝生寺 ⑪秋篠寺 ⑫長弓寺

法隆寺の門前にあるiセンターの二階に西岡棟梁の道具が展示されている。槍鉋（やりかんな）が展示されているが、現在の大工さんが普通に使っている台鉋（だいかんな）は当時、存在していない。昔は、縦挽きの鋸がないので木を割り、斧ではつり、手斧（ちょうな）で荒く平らにする。普通はそれで終わりだが、もっと平らにし、きれいに見せたい場合、槍鉋を使う。

槍鉋は、西岡棟梁が法隆寺の古い釘を使い、刀鍛冶に頼んで復活させたものである。槍鉋は、面の仕上げに使うが、まっ平にはならず、さざ波がたった池の水面のような仕上げになる。室町以前の建物を復元するときには、槍鉋を使わないと削り肌が合わないのである。今のような便利な道具で、古建築が建てられていたわけではないことを知り、どうやって建てたのか、道具は何を使ったのかを知っておかないと建物の理解が浅くなる。

ところで、法隆寺の五重塔は屋根の数を数えると6段ある。一番下は、裳階（もこし）といい、数えない。裳階は、風雨から守るための塀と同じ役目である。創建当時にはなかったが、後に設置されたものである。大した道具もなかった1300年前の建築手法について、温故知新のため、是非読んで欲しいと思う。

（文春新書、254頁、996円（税込））（鈴木賢二）